

## 令和5年度第1回島田市総合教育会議会議録

日時	令和5年12月22日（金）午前9時30分～午前10時50分
会場	島田市役所3階 大会議室
出席者	染谷市長、山中教育長、高杉委員、原委員、磯貝委員、森下委員
欠席者	
傍聴人	18人
説明のための出席者	佐藤市長戦略部長、小松原教育部長、中村戦略推進課長 村田学校教育課長、中村学校教育課主席指導主事
議事 意見など	今後の不登校対策について ・新しく学びの場を作ることも1つのやり方である。 →どのようにして学びの場を創出するかということが課題。教員の加配や学びの場の場所、そこまで通う子供たちの交通手段の課題もある。 ・子供たちが学びたい、やってみたいと思ったときに挑戦できる環境を整え、受け皿をより多く作っておくことが必要。 ・退職教員等の地域人材を生かして、学びの多様化学校やその分校、分教室などの子供たちの居場所をつくっていくことの調査研究を進めていく。学びの多様化学校ができれば県から教員が派遣される。 →県内の市町はすべて設置されていない理由を考えないといけない。チャレンジ教室は同様の意図で設置している。 →学びの多様化学校は教員が関わるができることが大きな利点。学校への出席にできたり、学習の評価ができたり、通常の学校に通う状況とかなり近くなる。教育課程に余裕ができることで、子供たちがやりたいことをやることができる。 →子供たちのやりたいことを指導する方が必要ということは、学校の普通の教師の数以上に、支える人たちが必要になるという一面もある。 ・不登校の子は今の制度じゃだめなんだと訴えている。不登校の子供たちもすごい才能があり、きちんと教育を受ければ、将来社会に出て、各分野でリーダーになる子もいると思う。何とか1人でも多く、豊かな自分の人生を送ってもらいたい。 →具体的な場所や人、どれくらいのお金がかかるのかということまで、全部パッケージにして実現の方法を考える必要がある。それを具体化するためには、どういうことが必要なのか、どんなハードルがあるのかということも考えていかなければならない。また教育委員会と市長部局が膝を突き合わせて、議論していくということがすごく重要である。 ・先生方が本当に忙しい中で、子供たちの小さなサインを見逃さない

ことは難しいことであるが重要。

・コロナ禍前は、学校保健委員会が各学校で行われていて、保護者も参加できた。コロナが大分収まってきたので、また保護者も参加できればよい。

→教育部にお願いしたい。

開 会 午前9時30分

佐藤市長戦略部長

それでは、定刻になりましたので、ただいまから令和5年度第1回総合教育会議を開会いたします。

はじめに、染谷市長から御挨拶をいただきます。

市長、お願いいたします。

染谷市長

皆様、おはようございます。座ったままで失礼させていただきます。

委員の皆様におかれましては、大変お忙しいところ、当会議に御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

本日は、市内における不登校対策について、皆様の御意見をお伺いしたいと思っております。

全国的に不登校の人数は増加しておりまして、令和4年度は過去最多となっております。今朝のNHKのニュースなどでも、この問題、不登校の特認校などが取り上げられておりました。

さらに、不登校児童生徒には、複雑なと言いますか、複合的な要因が重なって不登校になっている、1つだけの理由で不登校になっている訳ではないということもございます。

不登校対策というのは、今は大変重要な課題となっております。本日は皆様から、この対策、対応について、忌憚のない御意見、御提案をいただきながら、今後の不登校対策について、しっかりと議論してまいりたいと考えております。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

佐藤市長戦略部長

ありがとうございました。

続きまして、山中教育長から、御挨拶をいただきます。

教育長、お願いいたします。

山中教育長

皆様、おはようございます。

今日の総合教育会議では、島田市に不登校児童生徒ほぼ200名ぐらいいるという、その実態をつかみながら、不登校の児童生徒に対して、どういう対策をしていったらいいのかということ、教育委員の皆さんといろいろ意見を交わしながら考えていきたいというふうに思っております。

教育委員の皆様は、市内の小・中学校を訪問する中で、各学校の不登校の児童生徒がいることや、また学校によっては不登校の児童生徒のために別室を用意して、先生方が別室にいる不登校児童生徒に指導

に当たっている姿等も見てくださっています。また、教育委員さんたちは、島田市の教育について考える中で、中学校部活動の地域化についての学習会を開いたり、不登校児童生徒の現状や全国で行われています対策等の学習をしたりしてきております。

その中で特に不登校児童生徒の対策については、家庭からの視点や学校からの視点、また本人の視点等様々な見方がありまして、一概にどのような対策を立てればいいのかといった簡単なものではないという感想をお持ちです。

ただ、今回のこの不登校児童生徒についての会議につきましては、今回だけでなく、今後継続して考えていかなければならないテーマであるというふうに考えております。

今日は教育委員の皆様のご意見を市長に聞いていただきまして、今後不登校児童生徒への対策などを一緒に考えていただければというふうに思います。またこのような機会を与えていただきましてありがとうございます。

佐藤市長戦略部長

では皆様、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

それではこれより議事に入りますので、以降の進行につきましては、市長をお願いいたします。よろしく願いいたします。

染谷市長

では、次第に従いまして、早速ではございますが、議事を進めてまいります。

では、本日の議題が「今後の不登校対策について」となりますので、まず学校教育課から、添付されております資料についての説明をお願いいたします。

中村学校教育課主席指導主事

学校教育課の中村と申します。よろしく願いいたします。

私からは、島田市の不登校児童生徒の実態について、それから現在行っている対策等についてお話をさせていただきます。

まず、国の実態ですけれども、不登校の定義ということで、定義は何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因、背景により、登校しないあるいはしたくてもできない状況にあるため、年間30日以上欠席したもののうち、病気や経済的な理由によるものを除いたものとされています。

この年間30日以上というところで、島田市の人数も本日実態としてお知らせをしたいと思います。

令和4年度の小中学校における不登校者数の状況ですけれども、国は約29万9,000人、そのうち90日以上欠席が5万9,000人と10月に発表いたしました。いずれも過去最多ということです。

対策といたしまして、主に2つの対策を国として挙げています。令和5年度3月に「COCOLOプラン」、10月に不登校・いじめ緊急パッケージというものを対策として挙げております。これは資料1と資

料2になります。

この2つに共通していることは、不登校の子たちを学校に来させる、不登校児童生徒をゼロにするのではなく、不登校により学びにアクセスできない子供たちをゼロにするということ、目指す取組を対策として挙げております。ここを受けて島田市としても対策を考えているところでもあります。

まず、「COCOLOプラン」ですけれども、不登校になったとしても、不登校特例校、今は学びの多様化学校と呼んでいます、の設置。校内教育支援センター設置を促進して、学びの環境を整えることを対策として挙げています。

また、不登校になる前に、端末を使っての早期発見、チームで早期発見をしていくこと。また学校を安心して学べるところにあることなどを挙げております。

10月の不登校・いじめ緊急パッケージでは、令和4年度の不登校数が最多になったことを受け、資料2にある対策を出しております。先ほどの「COCOLOプラン」を前倒しをして進めていくこと、不登校施策の情報を児童生徒、保護者に届くよう情報発信を強化することなどを、対策として挙げております。

島田市の実態に入ります。

島田市の不登校の直近5年間の人数です。濃いオレンジが小学生、薄いオレンジが中学生の人数となっております。年々増加しておること、島田市においても令和4年度が過去最多になったということが分かります。

また、小学校に比べて、中学校が約2倍の不登校者数があるということ。グラフからは分かりませんが、小学校2年から3年生にかけて増えている傾向があるということや、中1ギャップと言われてるように、小学校6年生から中学1年にかけても増加率が上がっております。

割合で見えます。不登校児童が全体の児童に対して、どれくらいの割合かを表したものです。これも直近5年間のものです。

青い太いグラフが、島田市のものとなっております。県はオレンジ、灰色（グレー）が国となっております。年々増えていることが分かります。

数字は島田市のものだけ入れてあります。そのほかの細かい数字は、資料を御覧ください。5年間で小学生は約1.7倍の割合で増えています。

中学校を見ても同様です。同様に濃い青が、島田市の数値です。中学校も同様に増えていることが分かります。

また、令和4年度の割合は5年前の平成30年に比べて、ちょうど2倍となっていることが分かります。また中学生においては、令和2年

度は、国や県の割合も超えています。

細かな人数について説明をします。島田市の不登校児童生徒と他機関のつながりというところで見えます。

学校とのつながりがない、また、他機関とのつながりもない児童生徒数というのは、小学校も中学校もゼロ人ということです。つまり安否は取れている、学校の先生方、学校が何とかつないでいて、保護者や不登校児童生徒と何らかの連絡やつながりを持っていることが分かります。

学校からの学習資料、プリントだとかICTを通しての学習課題の配信等をしているが、学習はうまく成立していないんじゃないかと思われる児童生徒数は、11月の統計で65人ということが分かります。つまり、不登校になっている児童生徒は、学べているのだろうかというところが課題となってきます。

また、登校している、または時々登校しているのですが、学校にいる間の半分以上が自分の教室ではなくて、いわゆる別室ということで、そこで過ごしている子供たちは、小学校31人、中学校28人。59人の子たちは、この子供たちには学校には居場所があるんですけども、まだそこできちんと学べているかどうかというところは調べておりませんので、この後の課題になってくるかと思えます。

この子供たちに学びの場を保障したい、またこの子供たちが学校に来ている状態ですので、学習する楽しさとかそういったものを味わわせて、教室に戻るようにしたいということも願いであります。

主な理由として挙げられるものを説明します。

不登校の原因は多岐にわたっていて、また複合することもあって特定が困難です。学校として挙げているものは、小学校においては、不安、無気力、また小学生においても学業不振、人間関係、家庭に関わる状況などが挙げられています。中学校としては、ほとんど同じなんですけども、小学校から中学校への入学だとか、進級時の不適応などが入ってきます。

続いて対策です。

学校として学習するために、登校を支援していることとしましては、学級担任が中心となって面談をしたり、電話をかけたたりして、学校の状況を伝えたり、家庭の状況を聞いたり、また保護者とつながったりしています。放課後の登校を薦める場合もあります。

1人1台端末「Chromebook」と言いますが、そこでつながっていて会話をしたり、学級の雰囲気動画を動画で伝えたりする事も聞いております。

また、市の適応指導教室のチャレンジ教室、校外の適応指導教室もみの木学級の紹介をすることもあります。

また、先ほど言った別室を校内に準備して、教室に入れなくても学

校に来て何か学習の機会を与えるということもして、子供たちの居場所づくりとともに学習の機会を作るようにしています。

別室というものを準備している、または整備している学校についてですけれども、島田市内23校のうち、何も用意しないという学校はありません。保健室をベースとしている3校。保健室ではなく図書室やパソコン室などと併用して別室としている学校が13校。またそれ以外に、不登校児童になりそうな子、何とか学校に来ている子たち専用の部屋をしている学校が7校、現在あると聞いています。

市教委としましては、心の健康観察というものの導入の検討を、今進めているところです。言葉では表現することができない心の状況を先生にちょっと相談してみたいなということ、相談できる機会をChromebookで表すことができるようになってきているものです。

学びの場、学びの機会を作るというところでは、学校としては、訪問やChromebookで学習に向かう時間を作る、訪問のときに学習のプリントを渡したり、今こんなことを学校でやっているよという状況を伝えて、来たときに学習に入りやすいような雰囲気を作ったり、Chromebookで学校側から課題を発信して、そこでの取組を促したりして、学習に向かうという習慣を付けておくとか、時間を作っているような努力をしています。

また、先ほどから出ている別室というところをただの居場所ではなくて、次の日の予定を貼っておいたり、自分のクラスがこんな学習をしているよというのが分かるようなものを整えたりしています。

不登校児童生徒がChromebook、1人1端末をどれだけ持っているかということですが、ほとんどの不登校児童生徒が、家庭にChromebookを持って帰っているという学校が84%、一部だけれども持って帰ってますよというところが10%、ほとんどの学校がChromebookを持ち帰らせて、家庭に置くようにしています。

学びの場、学びの機会を作るというところでは、市教委としては学びの多様化学校分教室の調査研究を考えています。国の学習指導要領に捉われず、柔軟に教育課程を編成できる学校のことです。八王子市立高尾山学園では、左側の写真のようなプレイルームというリラックスできる場所を用意しておいたり、前の黒板にホワイトボードのようなものを貼っておいて、Bのカリキュラム、Cのカリキュラムを選べるようなカリキュラムを用意して、学校に来た子供たちが、無理なく学べるような取組をしていると聞いています。

また、多様な人材を活用することで、子供たちに学びの機会を与えるということも考えられると思います。退職教員を活用することで、子供たちの興味関心が沸き立つような学習を計画したり、個に寄り添った学びの充実を図ったりすることができるかと思っています。

また、学校教育支援員、専門的な知識技能を持った地域人材を有効に活用することで、様々な体験活動を経験することで、学ぶ楽しさを味わうこと。また支援員さんとは、担任とのつながりを作りにくい児童生徒にとっては、教員という立場ではない大人とのつながりができることが期待できます。

スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーとの連携も大事だと思います。心理的な支援、ケース会議によって個々の状況に応じた外部機関とつなげることで、初期対応をしていくことができると考えられます。

以上、学校教育課の説明です。

ありがとうございました。

ただいま、今後の不登校対策についての説明がございました。御意見、御質問などありましたら、よろしく願いをいたします。いかがでしょうか。

よろしく申し上げます、磯貝委員。

説明ありがとうございました。小学校、2年生から3年生にかけて、1つのピークがあって、それから中学校1年生でもギャップがあるという御説明でした。

市長からの最初の御挨拶の中でもありましたけども、複合的な原因があるというお話だったんですが、市教委としてはこの2年生から3年生にかけて、それから中学校1年生の状況というのは、どういう原因があるというふうに捉えているんでしょうか、確認ためにお願いします。

はい、お願いします。

学校教育課です。まず小学校2年生から3年生については、学校生活にも慣れ、そして人間関係も2年間、あるいは3年間の中で、大分作られてくる中で、様々な人間関係のこともそうですが、いろんな自我の芽生えというところも、そうした発達段階上様々なことに目線が行ったりとか、いろんなことを考えたりという状況が生まれます。当然その中には、非常にポジティブなものもあれば、不安であったりとか、そうしたなかなか自分が前に行けないというようなことなどいろいろ考える、そういったことが始まる時期かなと思います。

そこで自分と自分の生活とか、あるいは学習とか、あるいは友達関係とか、そういったところで不具合といいますか、そういったことを起こしながら、あるいは家庭の問題も大きいからということもあるかなと思いますけども、様々な理由から学校に行くことができなくなるということが生じているかなと思っています。

中学生については、やはり中1ギャップという言葉もありますが、環境の変化というところは1つ大きいかなと思います。なるべく島田市又は学校でその環境の変化というところを、小さくするには努

染谷市長

磯貝委員

染谷市長

村田学校教育課長

めていますけども。新たなステップ、発達段階に入る、新たな進学、中学校というところで、なかなか適用ができなかった場合、学校関係ではそういうところになりますが、また生活自体がやっぱり変わってくる。学校だけではなくて、そうしたことも要因の1つかなと思っています。

磯貝委員  
染谷市長  
原委員  
村田学校教育課長  
染谷市長  
高杉委員  
染谷市長  
村田学校教育課長  
染谷市長  
高杉委員  
染谷市長  
森下委員

以上です。

ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょう。

原委員、お願いします。

ありがとうございます。聞き漏らしたかもしれないんですけども、市のチャレンジ教室ともみの木学級、今は何人ぐらいの生徒さんが利用しているか、分かりますでしょうか。

チャレンジは今現在30人程度が通っております。例年40人ぐらいが登録という形で聞きますが、30人から40人ぐらいの間で考えていただいていると思います。

それから、もみの木については、10人に満たない程度というふうに考えています。

以上です。

よろしいでしょうか。いかがですか、ほかに。

高杉委員、お願いします。

中学3年生で義務教育が終わるのですが、中学生の不登校の生徒が1年から3年を合わせて140人いて、3年生もかなりの人数がいると思います。卒業後の進路などは、近年、島田市の生徒は、どのようなところに行っているか、分かる範囲で教えてください。

課長、お願いします。

普通高校というところがまず1つありますし、そのほか、通信制の高校であったりとか、あるいは私学の単位制の学校、高等専修学校であったりとか、あるいは公立の定時制高校という場合もあります。それぞれに自分に合った学校、学力等も含めながら進学している様子があります。

以上です。

よろしいですか。

はい。ありがとうございます。

森下委員、お願いします。

御説明ありがとうございます。国のCOCOLOプランの中にある、スペシャルサポートルームという提案があるんですが、今現在校内に別室で準備して、そういった適応できない生徒さんを迎え入れたり、チャレンジ教室だとかもみの木学級というものがあるんですが、それに加えてスペシャルサポートルームというのは、国としてはどんなようなことをさらにそれに加えて臨んでいるのか、もしお分かりになれば



中村学校教育課主席指導主事

ば教えてください。

不登校・いじめ緊急パッケージによりますと、校内教育支援センター、スペシャルサポートルーム等の未設置校への設置促進という書き方をしておりますので、どの学校にもこういったものがあるといいということを考えているのだと思います。

別室と校内教育支援センタースペシャルサポートルームのはっきりした線引きというものは定義されてはいないんですけども、別室というのは行きづらい子供たちが学習したり、友達と交流したりする場所、また居場所ということになると思います。校内教育支援センターとなりますと、教育相談に乗ったりすることもできる場所というようにありますので、別室とは少しまたちょっと違うところだと、こちらは捉えています。

染谷市長

分かりましたでしょうか。私もいろいろ感じるところがあるんですけども、別室があっても、そこに人を配置していないとただの自習室と同じになっちゃうんですね。やっぱり先生がいて、教えることができる、学ぶことができるというところが違うのではないかというふうに思います。

ほかにはいかがでしょうか。不登校が増えている理由でありますとか、あるいは、この子供たちの居場所といいますか、学びの場の保障ということについて、何か御意見等ありましたら、お話を聞かせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

磯貝委員、お願いします。

磯貝委員

先ほど説明があったように、今学校は結構いろんな施策を打たれています。学校訪問をすると分かるんですけども、本当に学校支援の人たちも、先生と一緒に授業をされていますし。それから別室登校している子供たちも、ちらっと見たこともあります。

ただ現実にはやれる方法が限られている中で言うと、例えば先ほど説明がありましたけれども、新しく学びの場を作るという方向も、1つのやり方かなというふうには思います。それが現実にはできるかどうかはともかくとして、話を聞いたところでは、県も何か考えているようなところもあるように聞いていますので、そういう方向でやれるのが、取りあえずの現実的な方向じゃないかなと、1つは思います。

そういったところが、たまたま市内の北部では、小学校が閉校するという時期とも重なっていますので、そういう施設なんかも作ればありがたいのかなとは思っています。

将来的には、金谷にある新しい高校みたいなことも今設置が考えられているようですし、そういうところと教育的なつながりが、小学校、中学校、高校というような段階でいけると、誠にいいなというのは、これは1つの夢ですけども思ったりしています。

染谷市長

ありがとうございます。私からは、まず1つに教育委員の皆様方に

感謝申し上げたいのは、皆さん方が毎年必ず全ての学校を回って、教育の現場を見学というか見ていただいて、学校の雰囲気、共通の学びの様子、子供たちの様子、それを実際に見ておられるからこそ、発言にも力があるというか、現場に行っているということはすごく大事なことで、これはどこの教育委員会もやっているわけではありません。規模の大きな町ではとてもできませんし、だからといって、私どもと同じぐらいの規模であっても、教育委員さんが毎年全ての学校を回って見ていただいて、学校をサポートするという、その思いを学校側に伝えてくださっている、そういう教育委員会は少のうございます。そういった中で、皆様方の教育委員会としての日々の活動にまず感謝したいと思います。

今、学びの場の創出という言葉が出ました、どのようにして学びの場を創出するかということが、やはり課題だと思うんです。つまり具体的に言うと、教員をさらに増やすという加配ができるのかどうか、これは県がするかどうかということにかかっていますし、場所の問題もあります。場所がどこか特定の場所があれば、そこまで通う子供たちの交通手段をどうするんだというようなこともございます。様々な具体的な課題もある中で、いずれはそれぞれ学校にこうした子供たちが学ぶことのできる、学びを保障できる場所があるということが一番なんですが、学校になかなか加配がつかない中で、今の体制の中で先生方にそこまでやっていただけるのかどうかというような課題もあります。

今、島田市の不登校の子供たちは、必ずどこかとはつながっているということは実態としてありますが、市としてこれからどんな形で進めていくのがよろしいのか、これは学校の問題だけではなくて、少し遠因として考えれば、例えば子供たちが放課後児童クラブで、3年生ぐらいまでじゃなくて6年生までは見ることができるようになって、中学1年生になって、ぱっと他に行くところもなくなって、中学校という新しい環境に変わって、自分で判断してやらなきゃいけない、これは子供にとってすごく大きな環境の変化ですよ。

こうしたずっとつながっていくことの中にも、もしかしたら子供たちにとって、その環境の変化という重圧を感じるようなことがあるのかもしれない。皆様には、島田市はどういう不登校の子供たちにとっての学びの場を創出するのかというようなことを、御意見いただければと思うんですが、いかがでしょうか。

もしなければ教育長、もし御意見があれば、どうでしょう。

原委員からですか、お願いします。

学校参観を通して、やっぱり学校の先生方が本当に、今打てる手はいっぱい打ってくださっているなというのを実感しています。

文科省で別室を作るとか、案はいろいろ出ているんですけども、

原委員

島田市はもう文科省で出ているような案を、具体的にやってくださっています。

例えば六合小学校では、一番最初の年はどこの教室でもいいから、ある教室を使って、子供の対応に力を注いでいくという話をしてくださって、その次の年に訪問したときには、もう部屋を作ってくださっていて、本当は事務処理の時間にあたっている先生が、子供対応に戻ってくださっているという状態で、子供に今日は何の勉強をしたいのか、何をやるということを相談しながら、子供の気持ちを大事にした指導を現実やってくださっていました。

やはり学校の中の限られた時間の中で、先生方も持ち時間が目いっぱいの中で、そうやって工夫しながら、不登校児に対応してくださっていることに本当にありがたいなという思いで見させていただいているんですけども。

学校に来られる子は、まだそうやって学校の中でいろんな手を打って、それからお休みをしたときにも、LINEを使って連絡を取ったりということをやってくださっているんですけども。じゃあ、学校に来られない子供たちをどうしていったらいいのかというのを考えたときに、島田市ではさっきも質問しましたが、チャレンジとか、もみの木とかいろいろな場を作って、いつでもいいよという対応で、子供たちを受け止めようとしてくださっています。

しかし、今現実はやっぱり200人超がさらに増えてきていると。そうしたときに、やっぱりさらに方法を考えなきゃいけないというふうに思います。子供たちが学びたいと思ったときに、やってみたいと思ったときに、それが挑戦できるような環境をやっぱり整えてやっていくこと、受け皿をより多く作っておくことが必要ではないかなというふうに思いました。

市民の方もいろいろやってくださっているところもあるんですけども、学校としてさらにできるならば、やっぱり多様な学びができるような場所を設置していくことで、そういう子供たちの選択肢が増えるのではないかなというふうに思います。

それには多くのお金と多くの人材が必要になって、簡単にすぐできるかというところではないんですけども、やはりいかに受け皿をたくさん用意していくかということが、やっぱり問われているのではないかなというふうに思います。

以上です。

ありがとうございます。本当にそのとおりでなと思います。

現実はどうやって、その課題を解決して、クリアしていけるかということですし。学校も級外の先生が、だんだん少なくなっているのも現実でして、その中で、対応に当たってくださっている、その先生方に頭が下がると同時に、やっぱりそういう学校の数も増やしてい

染谷市長

森下委員

かなければなりませんし、いろんな課題があると思います。

森下委員、いかがでしょうか。

私も原委員の意見とほぼ同じなのですが、実際僕も新任の教育委員で回らしていただいて、本当に先生方がきめ細やかな対応を、支援員の方も含めてしていただいているというのは実際見まして、その辺は実感しております。

その結果として、恐らく先ほど資料に説明がありました、学校とのつながりがなく、他機関とのつながりもない児童生徒は、島田市は小中学校ともゼロ人という、こういった結果に表れているんじゃないかと。

聞くところによると、全国的には不登校生徒の3分の1はつながりが無いというような話もありましたので、非常に島田市の先生方は頑張っていると思います。

そんな中でも、やはり現実問題200人の生徒が不登校というような状況にあるということに関して、じゃあ何で不登校になったんだというそういう議論は、また別に必要かもしれませんが、その200人の子供たちの居場所というか、何か友達と毎日接することができるような場所の提供というのは、今やっている施策の中でやっても、さらに200人不登校なわけですから、我々市教委としてもその辺は考えていかなきゃいけないんじゃないかなという話も出ております。

以上です。

染谷市長

ありがとうございます。私からも伺いたいと思うんですけども。この200人の不登校のお子さんたちというのは、固定化しているわけではなくて、学校に行けるようになる方もいるわけですよ。新たに不登校になるお子さんもいる。

じゃあ、学校に行けるようになったお子さんが、何がきっかけで学校に行けるようになったんでしょうか。

村田学校教育課長

推測の部分になってくるんですけども、いろんなパターンがあります。例えば学校の友達が不登校の子たちに、いつもつながりを持って、例えば手紙を届けるであるとか、声をかけるとか、放課後に寄って行くとか、あるいは例えば、学級担任をはじめ、教員が保護者とつながりながら、子供が持っている不安とか課題というものを、できるだけクリアというかハードルを下げてやる。例えば、じゃあ別室のところであつたら、学校に来られるだろうかとか、来られる可能性あるいは外とのつながりを持てる可能性を探りながら、子供にとってできるところを模索しているということがあろうかなと思います。そういう努力の積み重ねというのは、非常に大事ななと思っています。

2つ目としては、1つのきっかけといいますか、例えば新しい年になるであるとか、学期、または結構多いのがやっぱり進学といいますか、小学校から中学校に行くとき、あるいは中学校から高等学校とか、

そっちに行くときに、子供たちがまた環境が変わるので、そこでまた学校に行くようになるという、特にこういう例というのが多いと思います。環境の変化も1つの大きなきっかけになるかなと思っています。

以上です。

染谷市長

環境の変化ということで、不登校からまた通いだすきっかけにもなるというお話でしたね。あとつながりですか、いろんな場で。

ほかに何かこのことについて御意見等ございましたら、お願いをしたいんですが。

どのように学びの場を創出するか、あるいはどういう場所が今後島田市にとって、具体的な施策として、教育の中でやれることがあるんだろうかというようなこと、ほかにも気付きのあることがございましたら、ぜひお知らせいただきたい、発表していただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

教育長、ありますか。

山中教育長

今も文部科学省では、子供の居場所づくりということで、各県に今まで言われるところの不登校特例校といったものを設置したいということを示しています。

現在は学びの多様化学校という名前がついているんですけども、この学校はいろんな県がありますけれど、まだ全ての県がそろっているわけではありません。静岡県でも、まだ設置されてないんですけども。一般的に1,050時間の授業時数を770時間にしたり、また子供の興味関心に沿って授業を行う、習熟度に沿って授業を行うとか、そういうような特別な教育課程というのが許されています。

私は小学校の校長をやっていたときに、その後、退職して理科の実験教室をやっていました。そのときに子供たちがたくさん来てくれた中で、先日ある場所でお母さんに会ったときに、子供さんはどこに行くんですかと聞くと、今高校ですね、という話をしたのです。そこで、うちの子は不登校になっちゃいましたという話をして、当時はその子はとても理科に、実験に興味があったと思っていたんですけども。あの子が不登校になってしまったのかなという思いと、もし興味があることを続けられるような場があったら、その子はどうなったんだろうなということも考えました。

そういう意味で、施策としてできることは、先ほど言いました多様化学校という大きなものでなくても、子供たちがそこに居場所をつくるのが、また先ほど学校教育課の中村主席から話がありました、退職教員等がいろんな技能を持っていますので、例えば木工とか、農業とかいろんなスペシャルな技能を持っている人たちがたくさん島田市もいらっしやるので、そういう人たちのお力をお借りして、子供たちの居場所があれば、例えそれが分校であったり、また分教室であった

染谷市長

りといったことができないのかなというのは、1つ施策として考えるところでもあります。島田市教育委員会でそういうことができないのかと思うので、少し調査研究を今進めているところでもあります。

ありがとうございます。まさに多様な学びの場をどうつくっていくかということではありますが、不登校特例校は実は静岡県内に1つもないんです、35市町のどこにも。やはりないという理由、なかなかできづらいという理由も、きっとあると思うんです。やっぱりそういうところを合わせながら、なぜ理想的な形にできないのかということも考えなければいけないと思っています。1つには、やはり県がこういったことに対して教師の加配をきっと付けてくれない、今の段階ではないんですよ。

山中教育長  
染谷市長

はい。

そうすると、どうすれば先生を雇うということが、そこまでやれるのかどうかとか。様々な先ほどお話したように、通学にも皆様は不登校のお子さんですから、一遍に同じ時間に来るわけじゃないんですよ。

山中教育長  
染谷市長

そうです。

お昼頃に来る子もいれば、放課後になったら来られる子もいて、そういう子たちが通うものを、例えば朝ならみんなでスクールバスでということもあるかもしれないけれども、通学の手段もなかなか難しい課題もあると思います。

理想は歩いていける自分の学校にあるというのが一番なんだろうけれども、それも空き教室の問題や、どなたが子供たちの指導に当たるのかという課題もある。それに、学校の教室だけではない、例えば陶芸をやるとか、スポーツをやるとか、自分の興味関心のあることを多様な学びとしてやっていくっていうのであれば、そういう様々なことができるスペースも必要という話になってきて、この辺りのところが具体化するときに、難しいハードルでもあるのかなというふうに感じるんですが、その辺りのところで御意見がある方はいらっしゃいますか。感想でも結構ですし、いかがでしょうか。

山中教育長

教育長、お願いします。

先ほど現在において、それこそ教員の加配というのはないですとお答えしたんですけども。

もし分教室とか分校という形になれば、一般的には県から教員が派遣されるという形になってくるものですから、そこについては、具体的には交渉、そして検討していかないといけない内容でありますけども、そういうものが出ていれば、県からも教員が派遣されると。我々のような教員が派遣されるという認識でいいと思います。

染谷市長

その多様な学びの場としての不登校特例校、あるいは別室でもいいんですけど、例えば学校なら校庭がなければいけないとか、教室は普

中村学校教育課主席指導主事

通授業とか、何か条件があるんでしょうか。

多様化学校も、1つの学校ですので、保健室だとか職員室とか、いろいろな条件が入ってくると思います。分教室となりますと、その辺の条件はかなりハードルが下がってくるということが分かっています。あとは文部科学省との交渉とか、相談ということで進めていくと聞いております。

染谷市長

いかがでしょうか。

原委員、お願いします。

原委員

やっぱりお金の問題が一番多くなると思うんですけども。しかし、今の現実の社会を考えたときに、やっぱり何とかしていかなければならないという、大きな課題だと思います。

できれば、分校のような形で、今の学校規模を少し拡大する具合で、何とか県の意向を動かすことができるならば、そういう設置をぜひお願いしたいなと強く思います。

というのは、多分子供たちは、学校に行きたくなくて来られなくなっているわけではないと思うんですよ。それとやっぱり多くの人と関わっていくことで、人として成長できる。それが今、家の中にこもっていたりしたらきちんとした成長、大人の心になっていく準備ができないというふうに感じます。

ですから、少しでもそういう場に出させてあげる、そういう環境に触れさせていくことで、また新しい自分のよさを発見したり、自分のやりたいことを見つけていったりして、自分が進む道が見えてくるんじゃないかなというふうに思います。

今の学校だけだと、もしかしたらもっと自分のやりたいことがあってもできなかったり、楽しいことができなかったりという思いもあったりするかもしれませんが、分校型になった場合に、やりたいことができる学校になるかもしれない。自分の希望をかなえる学校になるかもしれないと思ったら、そこに行くことが楽しみになるんじゃないか、楽しみになるような場を提供してあげたいというような思いがあります。

大変難しいことかもしれないですけども、少しでも今のカリキュラムに捉われた現状から、もうちょっと広い世界が見えるような経験できるような場を設定できたら、楽しみが増えるのではないかなというふうに思います。

以上です。

染谷市長

ありがとうございます。ただ、今の教育センターも、その趣旨でやっているんですよね。いかがですか。

村田学校教育課長

教育センターはもちろん今は学校に行けない子たちが、チャレンジ教室というような形で様々な活動の下に行っております。

プラスして、そういった分教室のところで、もし違いを言うならば、

学校の教員がそこに関わることができるというのは、1つ大きな利点にはなるかなとは思っています。

あと、教員が関わるということで、当然ながら今も出席状態ですけども、それが学校同士に通うということで出席になったりとか、あるいは学習の評価ができたとかというような、付随して通常の学校に行っている状況とかなり近いところまではいけるという点もあるかなと思っています。

以上です。

森下委員も、御意見がありましたか。

原委員の御意見とまた同じなんですけれども。

何らかの理由があって、登校できなくなっている子供たちが、やっぱりまた行きたくなるような仕掛けとか、そういったものにチャレンジしていかなきゃいけないのかなと思うんです。

どんな世界でもそうだと思うんですが、自分がその社会との関わりの中で必要とされている、あと友達ができて人間関係に満足するだとか、非常に信頼できる友達がいるということになると、自分自身に対してそのグループにいていいという自信が付いてくるのは、不登校児だけに限ったことではなく、みんな大人もそうだと思うんですけれども。

そういったことから何らかの理由があって外れてしまっているのだとしたら、そういった新たな仕掛けをして、カリキュラムも先ほどの説明で770時間でいいということで、比較的自由的な、教育長が先ほどおっしゃったような陶芸教室だとか、それぞれ自分の持っている理科が強いだとか、そういったことも伸ばせる余地がそこに時間的な余裕も出てくるんじゃないかと思いますので、そういった新たな学びの場の提供というのは、非常にいいんじゃないかなというように個人的にも思います。

おっしゃることは本当にそのとおりだと思います。ただ陶芸をやるにしても、何々にしてもそこにまた指導する方が必要ということも、学校の普通の教師の数以上に、支える人たちが必要だということも、やっぱり一面ではあるかなというふうに思うんですね。

磯貝委員から、何かありましたら。

市長は行政のトップの方ですから、私達が夢物語でいろいろ描くビジョンとは、また違う現実の厳しさの中で生きてらっしゃるので、なかなか言えないんですけれども。

例えば、不登校の子は、今の制度じゃだめなんだと訴えているような気がするんですよ。だから、例えば、今学校はこういう仕組みになっていますよ、学級はこういう仕組みになっていますよというような事務方の方々から説明がありましたけれども、やっぱりそういうところを、これは文科省の指導のこともあるので、私がとやかく言っても

谷市長  
森下委員

染谷市長

磯貝委員



染谷市長

何も変わりはないんですけども、やっぱりそういう枠組みをちょっとずつ崩していくようなことをしていかないと、やっぱりだめなんじゃないかなと思います。

不登校のことを思うと、私はいつもトーマスエジソンを思い出すんですよ、彼も小学校で問題児になっていて、確か校長先生からみんなの迷惑になるから、君は退学だと言われて小学校中退なんです。不登校になっている子供たちは、やっぱり一人一人はすごい才能があると思うんですよ。きちんと教育を受ければ、将来社会に出て、各分野でリーダーになる子もたくさんいると思うんですね。

だから何とか1人でも多く、やっぱり日本はいつまでいっても人材しか資源はないんですから、本当に1人でもいいから、そういう子供たちを引き上げて、自分の人生を、豊かな人生を送ってもらいたいなと思いますね。

抽象的なことばかりで申し訳ないんですけども、そういうふうに思いました。

私は今磯貝委員の話聞いていて、胸に刺さるものがあります。私も皆さんと同じ意見を持っている。ただ、その不登校の子供たちの居場所があって、自分はやれることがたくさんあるんだと自信を持って、もう一度チャレンジできる子供たちにしていくためには、具体的にどういう場所や人が必要で、そこにどれくらいのお金がかかるのかということまで、全部パッケージにして実現の方法なんですよ。

理想だけではいけないところもあるものだから、現実には他市町がうちよりももっと不登校の子供たちをいっぱい抱えているところがあるわけで、でもそれでも不登校の特認校や分教室ができないのは、なぜなんだろうかというようなことも併せて研究しながらですね、島田の教育という意味では、私は自信を持っているというか誇りを持っています。個に焦点を当てた教育をやってきましたし、心豊かに育てる、心を強くということも、ずっとやってきました。教育委員会も行動する教育委員会として、ずっとこれが島田の教育委員会だというものを、筋を通してやってきていただいているんですね。そこにはすごく誇りを感じていますし、島田市の教育は新たなチャレンジができるなら、それはすばらしいことだと思っているんです。

でも、それを具体化するためには、どういうことが必要なのか。あるいは、どんなハードルがあるのかということも一緒に考えていかないと答えがでない。理想は各学校にあるのが、私は理想だと。子供が通える、いつでも行けるような場所にあって、そこに指導できる先生がいることは確かにいいことだけど、でも学校だけではやっぱり子供たちのやりたいことを満たすことはできないでしょうし。どこか市内に1箇所というところ、それを今つくれるかもしれない場所としては、教育センターぐらいしか、今持っている施設の中にはないんですね。そ

ういう場所をどうするかという具体的な課題もあると思います。

こうした、こうありたいというものを、そうするためにはどうしたらいいかというところについてですね、ぜひまた教育委員会と市長部局が膝を突き合わせて、議論していくということがすごく大事ななというふうに思っています。

教育における不登校の子供たちを助けたいというか、今のままじゃだめなんだと、今の制度じゃだめなんだと訴えているように思うというその言葉は、私は胸に刺さりましたし、であれば多様な学びということで、どんな形ができるのか、これは市だけにできることには限りがある。県も国もやっぱりきっちりと関わり、理想だけを言うのではなくて、現実にもそれを作るために、やっぱり国や県もしっかりとお金も人も出さないと、そこにプラスアルファして市が独自の教育というのを付け足していくんですね。市だけでできるというのはなかなか、そこにも限界がある中で、どこから取りかかったらいいんだろうというところの、もし御示唆があれば、また御意見を聞かせていただきたいと思いますがいかがでしょうか。

今、不登校の特例校の分教室とか分校とかできないかということで、調査研究をするというお話が、教育長からありました。もちろんこれは調査研究してどうすれば実現ができるのか。島田の教育、島田の子供たちにとってどうすることが一番いいのかということは、しっかり議論していきますが、まずどこから始めたらいいのかというようなことも、併せて考えていかなければいけないなと思っています。

というのは、理由にはいろいろ不安とかありましたけど、この不安とは非常に漠然としたもので、多分不安が原因なんだろうと、学校の先生方が思っらっしゃるというこのアンケートの調査なので、子供たちが例えばこんな不安があると言ったわけではないんですね。どうですか、そうですね。

そうすると、不安とか無気力とかというのは、どうしてそうなったんだろうと思いますし。ただ、学校に行かないと、ますます不安が広がってしまうことは確かですよね。

あと、昔だと家庭が、学校に行かなきゃだめだと言って、学校に行きなさいというようなことがあったと思うのですが、今は家庭の状況というか、保護者の方々は、この不登校児童に対して、学校に行きなさいというところが多いのか、あるいは行けないんだったら行かなくてもいいよという親御さんが増えているのか、そのあたりはどうでしょう。

村田学校教育課長

様々だと思います。ただ総じて、やっぱり学校に行かなくてもいいというところからスタートしている訳ではなくて、やはり学校で学習をしたりとか、あるいは友達との生活ということを望んでいると思います。

ただ、それができない状況、なかなかそれがうまくいかないということがあります。それでもこの子にとってみて一番できることは何だろうかというようなどころからスタートしている御家庭が、多いのではないかなと思います。

その場合に、例えばチャレンジのような別の場所で、子供の数が、友達の数も少ないようなところ、また個別なところもあるでしょうし、あと、もみの木みたいなどころに行く場合もある。様々あると思います。

また、そうした保護者の考えというのは、教育センターが中心になって、わかあゆの会というものがありまして、そこで定期的に保護者の方に集まっていただいて、情報交換をしたりとか、そこでの悩み事であったりとかそうしたものを、相互に話をしたりとか、あるいはこちら側からも話をさせてもらったりしながら、共有したりとか、あるいはキャッチをしているところですね。

以上です。

染谷市長

今、わかあゆの会について、伺おうと思っていたところです。保護者の方々もそういう情報交換の場があり、かつ、また教育委員会とも連携が取れるという場所もあるということですよ。そして親の不安というのは、ある程度は教育委員会に入るような形にはなっているのでしょうか。

村田学校教育課長

特に学校では、個々の保護者の方と日々連絡を取りながら、子供の様子を聞いたりとか、思いを聞いたりとかしています。加えて、教育相談という形で、これも定期的になるのですが、保護者面談の中で連携というか、思いを汲み取るという場は今はあります。

先ほど言いましたように、わかあゆの会という不登校でなかなか学校に行けない子たちの保護者同士が集まることによって、なかなか言えない部分もそこで話ができたりとかして、様々な場面、形で汲み取ろうといたしますか、共有をしていきたいというふうにはしているところです。

染谷市長

ありがとうございます。不登校児童生徒を抱える親の会、わかあゆの会というものもあるということでありました。

学びの場の創出が必要だということは、みんなが一致した意見だと思います。それを具体的に場所だとか人材だとか、通学の方法だとか、それからどんなカリキュラムができるのかとか、こういった具体的なことも含めて、これからまた島田の教育として考え、また検討してまいりたいと思います。そのほか全体を通して、いろんな意見が出ましたけれども、さらに御意見等ありましたら、御発言をお願いしたいと思います。

磯貝委員。

磯貝委員

今、わかあゆの会の話が出ましたので。わかあゆの会は、確か社会

教育課が把握されていると思いました。ということは、年齢が高くなるわけですね

染谷市長 高校生の子も一緒なんですか、保護者の方は。

村田学校教育課長 小学校と中学校。

磯貝委員 そうですか。小学校も中学校も入っているわけなんですか。じゃあ僕の認識がちょっと違ってたんですかね。

村田学校教育課長 社会教育課では、青少年相談という形で、義務教育から教育相談等しております。

磯貝委員 そうですよ。以前、社会教育課が講演されたひきこもりの説明会、講演会に私参加させていただいたんですけども。そのときには、もうデータとして、不登校の子の60%が引きこもりになりますというお話がありました。

そういう中で、わかあゆの会というのは、やっぱり大きな力を持っているのかなと思っています。新年度子ども家庭庁の中の下部組織が、地方公共団体にできるという話をちょっと聞いたことあるんですけども。

染谷市長 令和6年度から、島田市も子ども家庭センターということでつくってまいります。子供のことにしましては、そこで一元化して、福祉の問題、それから子供の教育もいろんな形で重なりながら、そこで一元的にお受けすると。

わかあゆの会は小中学校の不登校児の親の会というふうに、私は認識をしております。そして今、磯貝委員からお話が出たように、不登校児童が大人になって、そのままひきこもりに移行していくという率はかなり高いんですね。

ですから、不登校をなくすというのは、将来的なひきこもりを減らしていくということにもつながっています。またひきこもりの39歳以下は、国の言うところのひきこもりなのですが、40歳以上の比較的年齢層が高いひきこもりも、今非常に大きな問題になっているというところにつながっていくというか、そういうデータがあることを考えますと、やはり不登校をできるだけ短い期間で、また元のように学校に通えるようにしていくということは、すごく大きな課題だと思っています。

ほかには、いかがでしょうか。

磯貝委員 今年の10月の文科省のこのCOCOLOプランのデータを出すときに、出てきたデータだと思うんですけども。不登校になる子供たちのアンケートを通じて見ると、誰にも相談しなかった、あるいは相談するのが家庭のお父さんだったり、お母さんだったりという子供たちがほとんどであって、学校の先生とか養護教諭の先生たちと相談したというデータが、かなり小さいというようなデータが出ていますので、やっぱり小さなサインを見逃さないということが、とっても大事なの

かなというふうに、私は思いました。学校訪問をして、学校の先生方が本当に忙しいお仕事の中で、そういうサインを本当に見つけていくということは、本当に難しいことなんですけども、やっぱりそこが大事なかなということを改めて思いましたので、これからもよろしくお願いします。

染谷市長

ありがとうございます。

高杉委員、いかがですか。

高杉委員

最近は新聞やテレビで、自然の中で行う学びの多様な学校みたいなものを、市の教育関係の人はもちろん、一般の人も見る機会が増えました。そういうところだったら行けるかなと、考える人もいるかもしれません。今はホームページだとかインスタグラムとかでも、市のものはもちろん、民間で支援している学校がいろいろできているのがわかります。私達もそういうところだったら行きたい、と考えるかもしれません。また、そういうところをつくってみたいという人たちもいるので、連携していければいいなというふうに思います。

それから、自分の子供が小中学校だったときのことを、今回いろいろ思い出してみたんですが、なかなか先生が忙しくなって、子供が、雑談をする時間がなくなったというのは言っていました。

それから、学校保健委員会が各学校で行われていて、自分の心の持ち方、イライラしたときにはどうしたらいいのかというのを、学校全体だとか学年全体で聞くことがあって、まだコロナの前だったので、保護者も参加していいよというのがありました。また今コロナが大分収まってきて、人数もたくさん集まる機会ができてきたので、学校保健委員会に保護者も参加できたりすればいいなと思います。

保健便りだとか、カウンセラーさんのお便りも読み返してみると、自分もやっぱり心が落ち着くようになったので、助かったことを思い出しました。

染谷市長

ありがとうございます。具体的にいろいろ御示唆をいただいて、今の御意見については、すぐにでも届けられるところがあると思いますから、また教育部でお願いしたいと思います。

そろそろ時間が迫ってきましたけれども、今回不登校児童生徒の多様な学びの場をどうつくっていくかということでお話をさせていただきました。

この1回だけで終わる話では全くないし、何度も何度もこういった対話を重ねながら、皆さんで共通理解というか、本気で定めていかなければいけないと思っています。私も教育部としっかりと多様な学びの場の実現ということで、どういう手立てがあるのか、どういう方法があるのかということ、しっかり考えてまいりたいというふうに思います。

誰一人取り残すことがない学び場の保障、これがやはり一番大事な

ことでありまして、今の不登校児童生徒の学び場をどのように創出していくのかということについて、今後もしっかりと取り組んでまいりたいと思っております。

今日は具体的に学校に行けないという不登校児をどうしたらいいかということでしたが、それに付随する、ひきこもりの問題とか家庭の問題だとか、様々な現実社会の課題もつながっていった話だというふうに思いますので、これからもしっかりと議論をさせていただきたいと思っております。

ほかのことでも結構ですが、何か御意見がある方はいらっしゃいますか。よろしいでしょうか。

はい、教育長お願いします。

山中教育長

皆さんの御意見を伺いさせていただきまして、私も本当に子供たちの対応でありますので、現場も多様な子供たちに対応できるようなものをきちんと準備できれば、本当にいいなと思います。

その中で先日、島田産業祭がありまして、そのときに、音楽広場のところで、VRゴーグルを被りまして、バーチャルの世界でいろいろと運動したりとかというのをやっていたものですから、私もそれを体験させてもらったんですけど。そこにいた方に、これを授業で使えないかという話をしましたら、使えますよという話があったので、島田はそういう形でも先進的にいろいろとやっているものですから、具体的にどんなことができるのかというの、ちょっと教育委員会として探してみたいなというふうに思いましたし、市長からお話いただきましたいろいろと具体的な今後の方策について、より細かく教育委員会としても検討して、どのぐらいの人材、そしてどういう形でということをしっかり研究して、子供たちのためにいい対応ができればいいなというのを改めて感じました。

染谷市長

本当にそのとおりだと思います。教育長がまとめてくださったような形になりましたが、それでは、ここで本日の議事は全て終了ということにさせていただいて、進行を事務局にお返ししたいと思います。

佐藤市長戦略部長

皆様方、長時間ありがとうございました。本日予定をしていた内容は、これで全て終了いたしました。

では、以上をもちまして、第1回総合教育会議を閉会させていただきます。本日はお忙しいところありがとうございました。

閉 会 午前10時50分